

# 平成31年度学校自己評価システムシート ( 県立川越特別支援学校川越たかしな分校)

目指す学校像	「生徒の可能性を広げ、未来をたくましく生きる力を育成する学校」
--------	---------------------------------

重点目標	1 社会自立に向けた豊かな学びを実現する 2 集団生活のルール・マナーを守り、幅広いコミュニケーションの力を身につけ、未来を「生きる力」を育成する 3 地域と連携した支援体制の確立と一人一人を活かした進路を実現させる 4 分校の特性を活かした、社会に開かれた学校づくりを推進する
------	--

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	10名
	生徒	6名
	事務局(教職員)	10名

学 校 自 己 評 価					年 度 評 価 ( 2 月 1 日 現 在 )		
年 度 目 標					達成度	次年度への課題と改善策	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況 ( ) は昨年度		
1	行事や特別活動で生徒が大きな充実感を得ていることが、生徒及び保護者のアンケート結果に表れている。授業は約4分の3の生徒が目標を意識し、取り組んでいる。このため、本年度は、行事や特別活動を従来通り維持しつつ授業においても、生徒自身が達成感をよりしっかりと味わい向上心を育めるような工夫が必要である。	シラバスの改訂を中心とした授業改善と特別活動の充実で達成感や自己有用感を向上させる。	①教育課程委員会を核とした全教員の話し合いの上、全授業のシラバスをキャリア教育の視点を持って見直し、年度内に改訂する。改訂は、以下のア～エに留意して行い、年度途中でも取り入れることができる内容は、適宜生徒に示していく。 ア 新指導要領と目指す学校像を踏まえる イ 目標に向けた到達度を生徒自身が評価できる ウ 内容と学習形態、方法が明確である エ 地域など実社会の中での学びがある ②検定試験の受験やコンクールへの出場、部活動での上位大会への出場など、授業や特別活動においてより高い目標に向けて取り組む。	①ア～エを反映した改訂となったか。また、授業の満足度は向上したか。(アンケートを2回行う)  ②・検定試験等の状況 ・大会等で成績 ・コンクール出場	①ア、イはすべての教科において、ウ、エも教科の特性に合わせて組み込んだシラバスを作成し、新年度に配布予定である。また、これらを踏まえ、職業を中心に教育課程を変更した。 生徒への授業アンケートにおいて「自分の将来を考えたとき、満足な教科」の1人当たりの選択個数の平均が4.6→5.1と向上した。特に学習への意識が低い層では2.5→4.7とほぼ倍増した。 ②台風により中止となった障害者スポーツ全国大会の出場権を獲得した選手が出た。NHK合唱コンクールへの全員出場と表計算ソフトの検定の希望者受検を新たに導入した。	A	目標を意識して授業に取り組んでいる生徒の割合が前年と同等であることと、自分の将来を意識して取り組む授業が増加していることが、生徒アンケートに表れている。このため、次年度は作成したシラバスを基に、さらに学習内容等を明確にし、社会の中での学ぶ機会を可能な範囲で取入れ、生徒の自己有用感を味わわせ、社会に貢献する姿勢を育てたい。
2	教員の指導と保護者の協力の下、生活のルールは概ね守られている。今後も個に応じた指導と支援の体制は維持しつつ、さらなる規範意識の向上を通じて校則を守る気持ちを育て、身だしなみや挨拶などを中心に自律的に行動できるようにしていくことが課題である。また、スマートフォンの利用方法やコミュニケーションのルールなどの学習は、家庭と連携し継続した指導を行うことが期待されている。	ルール・マナーを守り、望ましいコミュニケーションを自律的に行う力を育成する。	①状況に応じた生徒の課題を対話を通じて気づかせ、改善しようとする意欲を引き出す。 ②挨拶、言葉使い、身だしなみなどルールやマナーは全職員がア、イのとおり足並みを揃え繰り返し指導する。 ア 日常の様々な場面で意義や役割を話して開かせる イ 教員が待つ姿勢を持ち、自発的に行った場面で評価し、それをしっかりと伝える ③SNSの利用法を含むコミュニケーションのルールは、今まで同様に生徒指導主任が情報のハブとなり教員の目線合わせを行い継続的に指導することを続ける。さらに、生徒向け「情報セキュリティ」講演会を実施すると共に、「いじめ防止」人権研修会でも扱い、生徒、教員の理解を深める。 ④ケース会議の支援内容を共有しつつ生徒指導会議にて指導目標や指導方針を検討し、「誰が、いつ、どこで、何を、どのように」の役割分担を明確にし、普段から職員の得意分野を生かしつつ組織的に対応する指導体制を機能させる。(特別支援教育コーディネーター、養護教諭、SCなどや外部機関とも連携)	①改善しようとする姿が見られたか。 ②ア、イを行ったか。  ③継続的な指導は行ったか。また、講演会、研修会で扱ったか。  ④課題を早期に発見し組織的対応はできたか。	①対話を通じて生徒と約束事を確認し、改善しようという努力が見られた。 ②ア、イとも概ね意識して指導にあたった。しかし、間違った挨拶をしていないかなど自信がない生徒も見受けられた。 ③指導体制は継続できた。5/24に埼玉県警サイバー犯罪対策課による生徒向け講演会を行った。人権研修会では扱わなかった。生徒アンケートでのSNS等でのトラブルは0件であったが、これ以外の友人関係で不満を持っていると、約1/4の生徒が回答している。 ④本年は、平素から生徒指導部や学年団などが情報共有し連携した指導を行い、生徒指導会議に上がる案件はなかった。 全体として生徒が落ち着いて学校生活を送った。一例として12月までの欠席率、遅刻率は次の通りである。(昨年同時期) 欠席率1.4% (2.5) 遅刻率0.3% (1.1)	B	全体として落ち着いた学校生活を送っているが、ルール・マナーを守り、望ましいコミュニケーションを自律的に行う力を育成していくことは、継続する必要がある。
3	進路の手引きや進路だよりなどの紙媒体で、一般的な基本情報は提供できている。一方で保護者は、卒業生の保護者の話や親亡き後の生活についてなど個別的、実的な情報を求めており、生徒の卒業後の生活を見据えた進路指導が必要である。一人一人を活かす進路を実現するためにも、さらに選択肢を拡大させたい。	キャリア教育の視点で取り組む進路指導を組織的に行う。	①全職員がキャリア教育の視点で授業や行事などの教育活動を捉え直し、場に応じて、その内容を生徒が自分の生き方と結び付けられるように説明する。 ②実習及び就労先企業をさらに開拓し、進路指導を行う。その際は、進路指導部で情報を共有し進路部主任の掌握の下、各学年の進路指導部員を通じて、学年教員が生徒の特長を活かすなど個に応じた指導を保護者や支援機関と連携しながら行うようにする。	①キャリア教育の視点に立てたか。  ②実習先数、職種数が増え、生徒の進路希望が実現されたか。	①生徒アンケートは上述の通りである。保護者アンケートにおいては、「キャリア教育の視点に立った学習」と「社会自立をめざした就労支援」についての肯定的な回答が、共に95%であった。 ②11月までの新規開拓事業所は23であった。生徒アンケートの実習先の否定的な回答は0であった。	A	生徒の発達段階や保護者の意見等を丁寧に把握することで、概ね生徒の希望を実現できるように取り組んでいる。今後も生徒、保護者、提携先事業所等と組織力を生かして緊密に連携していくことが肝要である。
4	中学生向けの情報提供など縦の繋がりはある程度できているが、同世代との繋がりは取り組む余地が残っている。特に、初雁高校との恒常的な交流を推進することが課題である。また、地域とのつながりを教育活動により多く取り入れることが課題である。	高校内分校として川越初雁高校及び地域との交流の活性化を図る。	①分校の情報発信をホームページ等を活用して、教務部が組織的、継続的に行う。 (②～④は川越初雁高校との交流) ②昨年同様の行事や生徒会その他に、部活動などでの継続的な交流を行う。 ③授業公開などを利用し互いに授業を参観する。 ④合同研修会を開催する。 ⑤2、3年の職業の授業で他校や地域などとの交流を伴う学習活動を行う。	①更新の回数、閲覧数、内容の充実があったか。 ②新規の交流があったか。 ③授業参観の延べ人数 ④研修会を開催したか。 ⑤交流授業の有無	①12月末までの9か月間で分校の出来事等を写真も多用し206回発信した。 ②例年の交流に加え、文化部和初雁高校書道部の交流を月1回程度行った。 ③1学期には相互に、2学期は分校初任者が授業を参観したが、数は多くなかった。 ④2月10日に生徒理解と支援に関する合同研修会を計画。 ⑤福祉施設及び小学校と連携した学習活動を計画、実施した。	A	学校教育目標の「自信を持って共に生きる」に向けては、高校内分校として川越初雁高校及び地域との交流のさらなる活性化を図り、恒常的な交流にまで持っていくことが次のステップである。

学 校 関 係 者 評 価	
実施日	令和2年2月26日
学校関係者からの意見・要望・評価等	
体験的な授業は大切である。より、機会を増やしたり内容を充実させたりすると良い。授業は生徒の状況に合わせたスピードで、ポイントを押さえて行われているのが良かった。	
丁寧に指導していることが伝わってくる。防災教育や非常時の対応(ハザードマップの確認など)を家庭と連携してできるとよい。	
定着率と再就職支援の制度に関する質問を通じて、分校の直近3年間の状況、卒業後の学校と支援機関の関係について理解が深まった。	
地域との交流は、機会が増加し、方法も多様になって行くといい。本校とは生徒だけではなく、保護者の交流があってもよいのではないかと。	